

シベリア奥の聖なる村

text by Shinji Ishii
文いししんじ

「トゥバってどこにあるんですか」
そうきかれるごとに、アジアの中心、そうこたえる。だって名著『トゥバ紀行』にそう書いてある。イギリスの冒険家がやってきてわざわざ「アジア中心の碑」を建てた。いまままだエニセイ河岸にまつすぐ建っている。

それでも納得しない相手には、ロシア全体の中央、シベリアのいちばん南、モンゴルの北西、と地図上の説明をするうちに、いちおう、わかったような顔にはなつてくれる。

アジアの中心、と矢で射すくめるように認識しておくのが、ぜったいかっこいいと思うのだけれど。

首都クズルの町を歩けば、その言いまわしが的外れでないことは明らかだ。市場、街路を行き交うひとびと。日本人とまったく変わらない、というより、いっそう原

日本人らしいトゥバ人の顔。より西方のキルギス、カザフ料理の店。白系ロシア人の家族がトゥバ語で語らっている。トゥバの土地は、まわりから、くつきり浮き彫られているんじゃない。その逆で、まわりから流入したさまざまな文化でこんもり膨れあがっている。

クズル到着二日目、トゥバ作家会議のミーティングが終わって、図書館員の歓迎式典に参加したあと、文化大臣も務めた會長さんに「ロシア古儀式派のひとたちが住む『エルジェイ』へ、いまから、いっしょに行こう」と誘われた。17世紀に、国家宗教になったロシア正教主流派の弾圧を逃れ、「古儀式派」と呼ばれるひとびとが、その土地までやってきた。現代の文明を取りいれながら、数百年前と基本にも変わらない、自給自足の暮らしを営んでいる。作家会議の参加者、先輩のTさんが、

「そこ、日帰りで行けるの」と心配そうにきいた。突然の話で、宿泊のための備えなどにも持っていない。「ああ、だいじょうぶだよ」

とこたえた感じの會長さんのあいまいな表情に、あ、ヤバいかも、と思った。乗りこんだクルマは、旧ソ連時代からガンガン使われてきた4WDバン「UAZ」。

二時間、三時間と走るうち、ああ、こういうクルマしか無理やわ、と心底納得した。アスファルト舗装はまたたく間に消失。じゃぼじゃぼ水の流れる森を突っ走る。木々を抜けたかと思えば、羊や牛が放牧されている草原を左右に揺さぶられながら進む。トゥバの風景の奥へ、さらに内奥へ。「古儀式派」のひとびとは、中央の迫害から逃れ、安寧な居場所を求めてやってきたのだ。あとからひとが追ってこようなどと思ってもつかない道程を選んだはずだ。ちようどこ

の、軍用車なみに無骨なクルマでもひっくり返りそうな悪路を。

その悪路まで消えた。目の前につづいてるのはガケ崩れのあとの斜面だった。瓦礫がごろごろ転がっているその上を、体感四十五度に車体を傾かせ、天井に頭を打たせればかりにバウンドしながら、UAZは、犬を連れた奥さんなみの速度で進んでゆく。一瞬ハンドル操作をあやまれば、ガケの下の河面へポールみたいに転落しかねない。信心深いひとたちのこの力はものすごい。あとできけば、Tさんはこの時点で日帰りをあきらめたそうだ。遅いって。

陽の光が淡く森にかかりだす頃、五時間ぶりに人工物が見えてきた。牧草地にかかった、なんの変哲もない木の柵だった。そんなものでも悪路中の悪路を走破してきた目には、救いの十字架みたいに耀きを帯びて映るのか。

手作りの道を通り、敷地の門につく。踏切状の横木がかたかた引き上げられる。UAZが、ふう、と大きく息をつくのがわかる。會長さんが、ウオッカの瓶を満載した段ボール箱をさげてクルマをおりる。夕暮れの草原は、歩を進めるたびに揺れ

動いた。一步ごとに、何百という小バツタが跳びあがる。七つ八つ、木造のバンガローが建っている。日帰り、なることばを口にするものはないなかつた。メモ帳やペンのはいったカバンを手に、みな、めいめに割り当てられた建物にはいった。スタンダードサイズの木造ベッドがふたつ。天井近くに裸電球がぶらさがる。すぐそばに流れる水をくんで、屋内にためておけるタンク。木製の厚いよろい戸。いまは七月。十一月ともなれば、空気は気化した氷と化す。表面だけでなく、地中深くまですべてが凍る。

夕食は、バンガロー村を守るおばさんの手作りだ。ボルシチ、魚のスープ。じゃが

いもと肉の煮込み、ソーセージにパン。すべてこの土地で生まれた食材たち。噛みしめると、自分もこの土地でいま、生きている、土地からたちのぼる夜気を呼吸している、と、そう実感する。ウオッカのグラスがまわされてくる。町なかで飲み食いする味はすべてこうした食物の影にすぎない。血のスープのように、トゥバの夜は色濃く更けてゆく。



トゥバ共和国

面積: 17万500km²
人口: 30万5,510人(2002年)
都: クズル
語: ロシア語、トゥバ語
区: シベリア連邦管区

Profile

1966年大阪生まれ。京都在住。著書に小説『ぶらんこ乗り』『麦ふみクーツェ』『ポーの話』『みずうみ』『四とそれ以上の国』など、エッセイ『人生を救え!』(町田康共著)『熊にみえて熊じゃない』『遠い足の話』、絵本に『赤ずきん』(ほしよりこ絵)など多数。

